

故 登内英夫会長を偲ぶ



えいしんいんかくでんけんしょうせいこじ

戒名 英信院 覺電賢照清居士

大正6年(1917年)10月23日 生

平成29年(2017年)2月7日 逝去(満99歳)



ルビコン株式会社



ルビコングループ

Rubycon

社 是

すべて日本一
になりましょう

五 訓

一. 日常の生活において誠実を貫きましょう

一. 正しく働き正しく生きましょう

一. すべてに愛情をもちましょう

一. 今日を反省し遺憾のなかったことに

感謝しましょう

一. 自己を信じ希望に生きましょう

斯くして自己を完成し 国家社会に貢献しましょう

登内英夫のあゆみ

大正6年10月23日、手良村沢岡（現在の伊那市手良沢岡）に6人兄弟の長男として生まれた。昭和10年に上伊那農業学校第一種農業科（現：上伊那農業高等学校）を卒業。その後、日本電機工業（株）小海工場へ入社。分析研究室にて成分分析等に従事した。



日本電機工業（株）勤務の頃



青年実業家としての一歩を
踏み出した頃

昭和12年、手良村出身の向山幹夫社長が囑託をしていた台湾電力（株）へ入社し、翌年渡台。台湾電力（株）松山製鉄試験工場に勤務。電気製鉄のための鉱物並びに製品の化学分析をする傍ら、旧台北帝国大学農林専門部農芸化学選科にて勉学に励んだ。

昭和21年、台湾にて終戦復興の手伝いに従事した後、伊那へ帰省。興亜工業（現：KOA（株））の向山一人社長にお世話になった後、昭和27年4月、弟の五昭氏と共にルビコン（株）の前身である（有）日本電解製作所を伊那市本町に設立した。

翌昭和28年3月には、“信”州の“英”雄たる企業を目指そう、という思いから社名を信英通信工業に変更。アルミ電解コンデンサの製造を本格的に開始した。また、この時商標「Rubycon」を制定した。

昭和30年、伊那市山寺に工場を建設し、移転するも、翌年火災により焼失。多くの方に助けられ、再度工場を建設し、アルミ電解コ



日本電解製作所（昭和27年）

ンデンサの製造を再開した。

高度経済成長もあり、順調に会社が拡大する中、昭和36年、労使協調の考えのもと、共に力を合わせて前に向かっていく姿勢を会社全体のものにするため、「社歌」を制定。社員が力を合わせて目指す姿として社は「すべて日本一になりましょう」を翌年制定。更にその実現に向けて社員が持つべき心がけ「五訓」を制定した。この五訓は「私たち自身や私たちの会社のあるべき姿を描きつつ、その達成に精進を尽くすことが私たちの人生の最も良いあり方だと信じ、大いに頑張ろう」との思いが込められている。



移転1年後に焼失してしまった工場（昭和30年）



新工場上棟式（昭和31年）

昭和47年には創立20周年を迎え、従業員数は500名を超え、国内には5か所の営業拠点をもち、グループ会社も信英機械製作所(現:ルビコンエンジニアリング株)を含む6社を展開する規模にまで会社を拡大させた。

昭和54年には本社工場(現:第二製造棟)を南箕輪村に建設、昭和57年の創立30周年には更に本社工場を拡大し、アルミ電解コンデンサトップメーカーとしての地位を築いていった。

平成2年、創立40周年を迎え、国際舞台で通用するものづくり企業を目指し、社名を商標にあわせ「ルビコン」に変更し、本社を伊那市西箕輪に移転。

平成14年の創立50周年には記念事業の一環として本社敷地内に技術センターを建設。当時、分散していた技術・開発・研究部門を一か所に集約した。創業当



現本社棟(伊那市西箕輪 平成2年建設)



技術センター(平成14年建設)

時から抱いていた「いつか技術開発部門の研究所を持つ会社になりたい」との夢を実現した。

平成24年の創立60周年を経て、創業当時、わずか8名でスタートしたルビコンは、現在全世界に20社のグループ会社を擁し、総従業員数3,000名を誇る一大コンデンサメーカーへと成長した。

企業経営の傍ら、昭和38年、地元の皆さんの強い推薦により伊那市議会議員選挙へ初出馬し、トップ当選。政治家としての第一歩をスタートした。その後、大恩人である向山一人先生の後押しもあり、昭和42年には長野県議会議員選挙に出馬し、当選。以降8期連続32年間、長野県議会議員として地方政治の発展に尽力した。

この間、企業経営者としての経験を活かし、企業の健全育成、経営合理化に向けて取り組むと共に、昭和62年には第62代の長野県議会議長に就任し、議会運営にも尽力した。

平成元年には「第18回オリンピック冬季競技大会招致特別委員長」に就任し、長野県への冬季オリンピック招致に向けて国内外で長野県をアピール。平成3年に無事招致が決まり、平成10年の冬季オリンピック成功へと導いた。

また、昭和51年から平成16年までの28年間、伊那商工会議所会頭(以降は終身名誉会頭)を務め、地元経済の発展に尽力すると共に、平成10年には登内時計記念博物館を開館し、自ら地元伊那市の文化、観光の発展に寄与した。



県議初当選(昭和42年)



長野県議会議長時代(昭和62年)

在りし日を偲んで



台北帝国大学在学当時(25歳)



創立30周年 社長室にて
(昭和57年4月)



創立50周年(平成14年6月)



伊那まつり開始式(平成6年8月)



秋田ルピコンにて工場指導(平成22年10月)



ルピコンエンジニアリング納涼祭(平成25年8月)



福島ルピコン忘年会(平成24年12月)



ルピコンインドネシアにて(平成27年10月)



勲三等旭日中綬章受章時
(平成11年11月)



紺綬褒章受章(平成18年3月)



英寿会忘年会(平成22年11月)



出版記念祝賀会(平成25年2月)

白寿 おめでとつ



白寿のお祝いにて(平成27年10月)



親しい仲間と数え100歳を祝って(平成28年11月)



数え100歳のお祝いで五昭社長と(平成28年11月)
(下)お祝いいただいたケーキ



OB・OGの皆さんとの忘年会(平成28年12月)

登内英夫語録

● 企業活性化のあり方

会社を発展させていく上で大切なことは、「現状に満足しない」「現状に踏み止まらない」ということです。

特に掲げた目標や課題が苦難の末にようやく達成できた時、実現できた時の「これでよし」という気持ちにいつまでも浸っていることはあってはならないということです。

我々企業人はその人生を通して、常に進歩と発展のために終生努力しなければなりません。従って常に企業を活性化するためにはすべての皆さんが、常に問題意識を持って、これで良いのかを反省しつつ仕事に従事し、創意を生かし、絶えず工夫、改善を加えていくことが必要となります。

それが仕事を無駄なく最も効率的に行うことになるはずです。

「安心と満足」こそ、進歩発展の敵であります。

● 製品は作った人の鏡である

よく「製造現場は生きている」と言われます。

生き物ですから当然私たちの心の持ち方に順応するところもあるのです。

私たちが一生懸命にしかも注意深く、そして真心を込めて作業し、

さらには絶えず創意工夫を加えていく習慣をつけるならば、

工程はますます安定し、品質が揃った良い製品ができるはずだと思います。

● 企業は和を持つ集団なり

企業は人であると言いますが、より大切なものは、人の和であると考えます。いかに優秀な人材が集まっている企業であっても、人の和が得られなければ決して立派な成果を生むことはできません。

立派な仕事をし、立派な業績をあげるためには、人の和こそが一番大切なのであります。

そして、人の和を欲するなら、自我を主張する前に他人の主張にも耳を傾けるだけの雅量を持たなければならないと思います。(ここで申す「和」とは、高い理想を掲げて協力して取り組むプロ集団であって、決して「仲良しクラブ」であってはなりません。)

我が社の興隆は私たち全社員のプロとしての和にかかっていることを自覚し、全員一致団結して「日本一のルビコン」から「世界一のルビコン」を志し、一層の努力をしなければならないのです。

登内英夫座右の銘

●「為せば成る」

「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」
江戸時代後期、米沢藩主であった上杉鷹山が家臣に教訓として
詠み与えたものです。

どんなことでも強い意志を持ってやれば必ず成就するということで、
やる気の大切さを説いた言葉です。

私もその気になって懸命に取り組みさえすれば、
大概のことは出来ると思っています。

そういった点で「為せば成る」は私の大好きな言葉の一つです。

●「越えても越えても峠あり」

元伊那商工会議所会頭である故下平昞四先生の著書のタイトルでもある
言葉です。

懸命に努力してやっと目的を達成したところで、周囲を眺めてみればまた
新たな峠があり、これを越えるには更に新たな努力をする必要がある。

人は終生努力を続けることが必要であることを峠に例えて詠まれたもので、
私も人間の一生は努力の連続であると思っており賛同できる名言です。

●「道近しと雖も行かざれば至らず、事小なりと雖も為さざれば成らず」

中国・戦国時代末の儒学者であった荀子の言葉です。

私が大変お世話になった恩人の一人である故向山一人先生(現:KOA(株)創業者)も
よくこの言葉を仰っていました。

容易に達成できることでも一步を踏み出さなければ行き着くことは出来ない。

どんなに小さなことであっても始めなければ完成しないという意味です。

社員には、労を惜しまず、志を高く持って取り組んで欲しい。

そして、私はいつも一步を踏み出すことの大切さを説いています。

登内英夫経歴

【略歴】(出生～会社関係)

大正 6年 10月	伊那市手良沢岡に6人兄妹の長男として出生
昭和10年 3月	上伊那農業学校第一種農業科卒業
10年 7月	日本電機工業(株)小海工場入社
12年 1月	台湾電力(株)東京支社勤務
13年 1月	渡台。台湾電力(株)松山製鉄試験工場勤務
18年 3月	旧台北帝国大学農林専門部農芸化学選科修了
21年 5月	台湾より伊那に帰省
21年 11月	興亜工業(現:KOA(株))入社
27年 4月	(有)日本電解製作所(現ルビコン(株)の前身)設立。(伊那市本町)
28年 3月	信英通信工業に社名変更 商標「Rubycon」を制定
29年 2月	信英通信工業(有)から信英通信工業(株)に組織変更
30年 1月	伊那市山寺に工場を建設、移転
31年 1月	前年に建設した工場を火災により焼失
31年 7月	工場を再建設
36年 7月	社歌制定
37年 1月	社は「すべて日本一にならねよう」制定
39年 1月	五訓制定
54年 4月	本社工場(現第二製造棟)建設
57年 6月	創立30周年。本社工場(現第一製造棟)建設
平成 2年 12月	信英通信工業(株)からルビコン(株)に社名変更 本社社屋を伊那市西箕輪に建設し、本社機能を移転
10年 6月	登内時計記念博物館建設
14年 4月	創立50周年。技術センター建設。カリヨン塔設置。伊那消防署へ消防指令車を寄贈
24年 10月	創立60周年。上伊那管内の小中学校、高校へプロジェクトを寄贈

【略歴】(議員関係)

昭和38年2月20日～ 昭和42年2月19日	伊那市議会議員(1期) 初出馬でトップ当選。
昭和42年4月30日～ 平成11年4月29日	長野県議会議員(連続8期32年)
昭和62年5月15日～ 昭和63年3月24日	長野県議会議長
平成元年10月3日～ 平成3年4月29日	第18回オリンピック冬季競技大会招致特別委員長
平成3年12月25日～ 平成10年3月23日	長野県体育協会オリンピック特別専門委員会委員長

【略歴】(主な団体歴)

昭和51年10月7日～ 平成16年10月31日	伊那商工会議所会頭
平成16年11月1日～ 平成29年2月7日	〃 終身名誉会頭
昭和57年12月16日～ 平成12年6月15日	長野県日韓親善協会会長
平成12年6月15日～ 平成29年2月7日	〃 名誉会長
昭和59年5月28日～ 平成14年5月28日	長野県貿易協会会長
昭和62年5月25日～ 平成11年6月7日	長野県体育協会副会長
平成11年6月7日～ 平成29年2月7日	〃 顧問
平成3年1月24日～ 平成13年4月13日	長野県経営者協会副会長
平成13年4月13日～ 平成29年2月7日	〃 顧問
平成12年6月13日～ 平成17年9月30日	社団法人長野県年金福祉協会会長

【主な表彰歴】

平成 6年 6月 6日	消防庁長官表彰
8年12月 6日	長野県議会より自治功労者(県議在職30年)として表彰
8年12月 6日	長野県知事より地方自治功労者として表彰
9年10月23日	全国都道府県議会議長会より自治功労者(県議在職30年)として表彰
9年11月20日	地方自治法施行50周年記念自治大臣表彰
23年 7月16日	日本体育協会・日本オリンピック委員会特別功労者表彰

【主な褒章歴】

昭和37年10月25日	紺綬褒章(手良小学校へ映像機寄付)
39年 6月 1日	紺綬褒章(商工会館建設資金を寄付)
40年 9月18日	紺綬褒章(手良小学校へプール建設資金を寄付)
48年10月 1日	紺綬褒章(手良公民館建設資金を寄付)
59年 5月29日	藍綬褒章(地方自治・産業振興功労者)
平成11年 5月19日	修交勲章彰義章(韓国政府より)
11年11月 3日	勲三等旭日中綬章
18年 3月29日	紺綬褒章(手良公民館へ土地を寄付)

ルビコン社歌

監修・創立者 登内 英夫
作詞 木下 仙
作曲 西村 好弘
編曲 坂下 滉

- 一. 信濃に山は多けれど 東仙丈 西に駒
千古に香る 処女雪の 伝統と進取
おオルビコン ともに励まん 手をとりにて
- 二. 南に遠く 行く水は 天の中川 悠久に
岩を削りて たゆみなし 努力と研鑽
おオルビコン ともに究めん 手をとりにて
- 三. 地には方だの花匂い 空に北斗の 光澄む
ふるさと伊那の 名に誓う 誠実と信頼
おオルビコン ともに進まん 手をとりにて

☆社歌の制定にあたって(登内英夫著「卒寿を超えて、いま、思うこと」より)

昭和36年は、社報「しんえい」の発刊と共に、ルビコン社歌を制定した年でもあります。

昭和27年に出発したわが社は、工場焼失などを乗り越え、好況の波に押される中で、創業10周年を迎えようとしていました。

その節目を迎えるにあたって、特に、労使の関係をそれまで以上に良くし、労使協調の考えのもとに、ともに力を合わせて前に向かって進む姿勢を会社全体のものにしたいと考えたのです。

そのための一つの試みが、前述した社報「しんえい」の発刊であり、もう一つが社歌の制定だったのです。社歌の制定にあたっては、私は特に、「伝統と進取」「努力と研鑽」「誠実と信頼」そして「ともに手をとりにて」という言葉を入れてもらえるよう要請しました。

「伝統」とは、会社が進歩し社会に認められるようになって初めて使える言葉ですが、そういう会社になるためには、なにより社員全員が前向きに物事を考え、取り組んでいく「進取」の精神を持つことが必要です。そして、日々「努力」し、相互に「研鑽」すること、そのため人には「誠実」であり、互いに「信頼」する仲間を作らなければなりません。

こうした私自身の思いを、従業員の皆さんと共に歌いたいと思ったのです。

社歌は3番までありますが、1番に「伝統と進取」、2番に「努力と研鑽」、3番に「誠実と信頼」の言葉が配置され、「ともに励まん(1番)」「ともに究めん(2番)」「ともに進まん(3番)」と言葉を継ぎ、最後はそれぞれ「手をとりにて」と結んでいます。

この歌詞は、経営者も従業員も、全員が、希望を大きく持ってことに当ろうという社風を顕著に表しているのだと、とても満足しています。